

彌次行

泉鏡花作

全一章

今は然る憂慮なし。大塚より氷川へ下りる、たら  
／＼坂は、恰も芳野世經氏宅の門について曲る、昔  
は辻斬ありたり。こゝに幽靈坂、猪又坂、くらがり  
坂など謂ふあり、好事の士は尋ぬべし。田圃には赤  
蜻蛉、案山子、鳴子などいづれも風情なり。天麗か  
にして其幽靈坂の樹立の中に鳥の聾す。句になるね、  
と知つた振をして聲を懸くれば、何か心得たる様子  
にて同行の北八は腕組をして少時黙る。

氷川神社を石段の下にて拝み、此宮と植物園の竹  
藪との間の坂を上りて原町へ懸れり。路の彼方に名  
代の護謨製造所のあるあり。職人眞黒になつて働く。  
護謨の匂面を打つ。通り抜ければ木犀の薫高き横町  
なり。これより白山の裏に出で、天外君の竹垣の  
前に至るまでは我々之を間道と稱へて、夜は犬の吠  
ゆる難處なり。件の垣根を差覗きて、をぢさん居る

か、と聲こゑを懸かける。黄菊ききくを活いけたる床とこの間の見透みとほさるゝ書齋しよさいに聲こゑあり、居ゐる／＼と。

やがて着流きなし懷手ふしころにて、冷つめたさうな縁側えんがはに立顯たちあらはれ、莞爾にっことして曰いはく、何處どこへ。あゝ北八きたの野郎やらうとそこいらまで。まあ、お入りはひ。いづれ、と言いつて分わかれ、大乗寺だいじょうじの坂さかを上のぼり、駒込こまごめに出いづ。

料理屋れうりや萬金まんきんの前まへを左ひだりへ折をれて眞直まつすくに、追分おひわけを右みぎに見みて、むかうへ千駄木せんたぎに至いたる。

路みちに門もんあり、門内兩側もんないりやうがはに小松こまつをならべ植うゑて、奥おく深く住すまへる家いへなり。主人あるじは、巢鴨邊すがもへんの學校がくかうの教授けうじゆにて知しつた人ひと。北八きたを顧かへりみて、日曜にちえうでないから留守るすだけれども、氣きの利きいた小間使こまつかひが居ゐるぜ、一寸寄ちよつとよつて茶ちやを吞のまうかと笑わらふ。およしよ、と苦にがい顔かほをする。即すなはちよして、團子坂だんごさかに赴おもむく。坂さかの上うへの煙草屋たばこやにて北八きた嗜たしむ處ところのパイレートを購あがなふ。勿論もちろん身錢みぜになり。此この舶來煙草はくらいたばこ此邊このへんには未だいま之これあり。但し濕しめつて味可あぢはひかならず。

坂の下は、左右の植木屋、屋外に足場を設け、半纏着の若衆蜘蛛手に搦んで、造菊の支度最中なりけり。行く／＼と古道具屋の前に立つ。彌次見て曰く、茶棚はあんなのが可いな。入らつしやいまし、と四十恰好の、人柄なる女房奥より出で、坐して慇懃に挨拶する。南無三聞えたかときよつとする。爰に於てか北八大膽に、おかみさん彼の茶棚はいくら。皆寒竹でございます、はい、お品が宜しうございます、五圓六十錢に願ひたう存じます。兩人顔を見合せて思入あり。北八心得たる顔はすれども、さすがにぎまぎして言はむと欲する處を知らず、おかみさん歸にするよ。唯々。お邪魔でしたと兄さんは旨いものなり。虎口を免れたる顔色の、何うだ、北八恐入つたか。餘計な口を利くもんぢやないよ。

思ひ懸けず又露地の口に、抱餘る松の太木を筒切にせしよと思ふ、張子の恐しき腕一本、荷車に積置いたり。追て、大江山はこれでござい、入と言ふなるべし。

笠森稻荷のあたりを通る。路傍のとある駄菓子屋

の奥より、中形の浴衣に縺子の帯だらしく、島田、襟白粉、襷がけなるが、緋褌を蹴返し、ばた／＼と駈けて出で、一寸、煮豆屋さん／＼。手には小皿を持ちたり。四五軒行過ぎたる威勢の善き煮豆屋、振り返りて、よう！ と言ふ。

そら又化性のものだ、急足に谷中に着く。いつも變らぬ景色ながら、腕と島田におびえし拳句の、心細さいはむ方なし。

森の下の徑を行けば、土濡れ、落葉濡れり。白張の提灯に、薄き日影さすも物淋し。苔蒸し、楡枯れたる墓に、門のみいかめしきもはかなしや。印の石も青きあり、白きあり、質滑にして斑のあるあり。あるが中に神婢と書いたるなにがしの女が耶蘇教徒の十字形の塚は、洙の路に迷ひやせむ、異圖の人の、友なきかと哀探し。

竹の埒結びたる中に、三四人土をはり居るあたりにて、路も分らずなりしが、洋服着たる坊ちゃん二人、学校の戻と見ゆるがつか／＼と通るに額母しく

なりて、後をつけ、やがて木の間に立つ湯束を見れば掛茶屋なりけり。

休ましておくれ、と腰をかけて一息つく。大分お暖でございますと、婆は銅の大薬罐の茶をくれる。床几の下に俵を敷けるに、犬の子一匹、其日の朝より目の見ゆるもの、由、漸と食づきましたとて、老年の餘念もなげなり。折から子を背に、御新造一人、片手に蝙蝠傘をさして、片手に風車をまはして見せながら、此の前を通り行きぬ。あすこが踏切だ、徐々出懸けようと、茶店を辭す。

何うだ北八、線路の傍の彼の森が鶯花園だよ、晝に措いた天女は賣藥の廣告だ、そんなものに、見惚れるな。おつと、また其古道具屋は高さうだぜ、お辭儀をされると六ヶしいぞ。いや、何か申す内に、ハヤこれは笹の雪に着いて候が、三時すぎにて店はしまひ、交番の角について曲る。この流に人集ひ葱を洗へり。葱の香の小川に流れ、とばかりにて匂にはならざりしが、あゝ、もうちつとで思ふこといはぬは腹ふくるゝ業よといへば、いま一足早かりせば、

笹の雪が賣切にて腹ふくれぬ事よといふ。さあ、じぶくらずに、歩いた／＼。

一寸伺ひます。此路を眞直に参りますと、一左様

《さやう

《三河島と、路を行く人に教へられて、おや／＼と、引返し、白壁の見ゆる土藏をあてに他の畦を突切るに、ちよろ／＼水のある中に紫の花の咲いたる草あり。綺麗といひて見返勝、のんきにうしろ歩行をすれば、得ならぬ臭、細き道を、肥料室の挟撃なり。目を眠つて呐喊す。既にして三島神社の角なり。

亡なつた一葉女史が、たけくらべといふ本に、狂氣街道といつたのは是から前ださうだ、うっかりするな、恐しいよ、と固く北八を警戒す。

やあ汚え溝だ。恐しい石灰だ。酷い道だ。三階があるぜ、浴衣ばかりの土用干か、夜具の裏が眞赤な、何だ棧橋が突立つてら。叱！ 黙つて／＼と、目くばせして、衣紋坂より土手に出でしが、幸ひ神田の伯父に逢はず、客待の車と、烈しい人通の眞晝間、

露店の白い西瓜、埃だらけの金罏焼、おでんの屋臺の中を抜けて柳の下をさつ／＼と行く。實は土手の道哲に結縁して艶輻を祈らばやと存ぜしが、まとも  
に西日を受けたれば、顔がほてつて我慢ならず、土手を行くこと纒にして、日蔭の田町へ遁げて下りて、  
さあ、よし。北八大丈夫だ、と立直つて悠然となる。  
此邊小ぢんまりとしたる商賣の軒ならび、しもたや  
と見るは、産婆、人相見、お手紙したゝめ處なり。  
一軒、煮染屋の前に立ちて、買物をして居た中年増  
の大丸鬚、紙あまた積んだる腕車を推して、小僭三  
人向うより來懸りしが、私語して曰く、見ねえ、年  
明だと。

路に太郎稻荷あり、奉納の手拭堂を蔽ふ、小き鳥  
居夥多し。此處彼處露地の日あたりに手習草紙を干  
したるが到る處に見ゆ、最もしをらし。それより待  
乳山の聖天に詣づ。

本堂に額き果てゝ、衝と立ちて階の方に歩み出で  
たるは、年紀はやう／＼二十ばかりと覺しき美人、  
眉を拂ひ、鐵漿をつけたり。前垂がけの半纏着、跣

足に駒下駄を穿かむとして、階下につい居る下足番  
の親仁の伸をする手に、一寸握らせ行く。親仁は高々  
と押戴き、毎度何うも、といふ。境内の敷石の上を  
行きつ戻りつ、別にお百度を踏み居るは男女二人な  
り。女は年紀四十ばかり。黒縮緬の一ツ紋の羽織を  
着て足袋跣足、男は盲締の腹掛、股引、彩ある七福  
神の模様を織りたる丈長き刺子を着たり。これは素  
跣足、入交ひになり、引違ひ、立交りて二人とも傍  
目も觸らず。おい邪魔になると悪いよと北八を促し、  
道を開いて、見晴に上る。名にし負ふ今戸あたり、  
船は水の上を音もせず、人の家の瓦屋根の間を行交  
ふ様手に取るばかり。水も青く天も青し。白帆あち  
こち、處々煙突の煙たなびけり、振さけ見れば雲も  
なきに、傍には大樹蒼空を蔽ひて物ぐらく、呪の釘  
もあるべき幹なり。おなじ臺に向願卷したる子守女  
三人あり。身體を揺り、下駄にて板敷を踏鳴らす音  
おどろ／＼し。其まゝ渡場を志す、石段の中途にて  
行逢ひしは、日傘さしたる、十二ばかりの友禪縮緬、  
踊子か。

振返れば聖天の森、待乳沈んで梢乗込む三谷堀は、

此處だ、此處だ、と今戸の渡に至る。

出ますよ、さあ早く／＼。彌次舷端にしがみついでしやがむ。北八悠然と。ハイレエトをくゆらす。乗合十四五人、最後に腕車を乗せる。船少し右へ傾く、はツと思ふと少し蒼くなる。丁と棹をつく、ゆらりと漕出す。

船頭さん、渡場で一番川幅の廣いのは何處だい。先づ此處だね。何町位あるねといふ。暉乾きて齒の根も會はず、煙管は出したが手が震へる。北八は、にやり／＼、中流に至る頃一錢蒸汽の餘波來る、ぴツたり突伏して了ふ。危険えといふは船頭の聲、ヒヤアと肝を冷す。圖らざりき、急かずに／＼と二の句を緯けるのを聞いて、目を開けば向島なり。それより百花園に遊ぶ。黄昏たり。

秋暮れて薄まばゆき夕日かな

言ひつくすべくもあらず、秋草の種々數ふべくもあらじかし。北八が此作の如きは、園内に散ばつた

る石碑短冊の句と一般、難澁千萬に存ずるなり。

床凡に休ひ打挑むれば、客幾組、高帽の天窓、羽織の肩、紫の袖、紅の裙、薄に見え、萩に隠れ、刈萱に搦み、葛に絡ひ、芙蓉にそよぎ、靡き亂れ、花を出づる人、花に入る人、花をめぐる人、皆此花より生れ出で、立去りあへず、舞ひありく、人の煤とも謂ひつべう。

など、落雁を嚙つて居る。處へ！ 供を二人つれて、車夫體の壯佼にでつぷりと肥えた親仁の、唇がべる／＼として無花果の裂けたる如き、眦の下れる、頬の肉掴むほどあるのを負はして、六十有餘の媪、身の丈拔群にして、眼鏡く鼻の上の皺に惡相を刻み齒の揃へる水々しきが、小紋縮緬のりうたる着附、金時計をさげて、片手に裳をつまみ上げ、さすがに茶澁の出た脛に、淺黄縮緬を搦ませながら、片手に銀の鎖を握り、これに渦毛の斑の艶々しき狎を繫いで、ぐい／＼と手綱のやうに捌いて來しが、太い聾して、何うぢや未だ歩行くか、と言ふ／＼人も無げにさつ／＼と一縦横 R T V じうわう》に潤歩する。

人に負はして連れた親仁は、腰の抜けたる夫なるべし。驚破秋草に、あやかしのついて候ぞ、と身構したるはどこそあれ、安下宿の娘と書生として、出来合らしき夫婦の来りしが、當歳ばかりの嬰兒を、男が、小手のやうに白シャツを鎧へる手に、高々と抱いて、大童。それ黼の道を切る時押して進めば禍あり、山に櫛の落ちたる時、之を避けざれば身を損ふ。兩頭の蛇を見たるものは死し、路に小兒を抱いた亭主を見れば、毒長からずとしてある也。あゝ情ない目を見せられる、鶴龜々と北八と共に寒くなる。人の難儀も構ばこそ、瓢箪棚の下に陣取りて、坊やは何處だ、母ちゃんには、見えないよう、あばよといへ、ほら此處だ、ほら／＼、はゝはゝ／＼おほゝゝと高笑。弓矢八幡もう堪らぬ。よい／＼の、犬の、婆の、金時計の、浅黄の禅の、其上に、子抱の亭主と来た日には、こりや何時までも見せられたら、目が眩まうも知れぬぞと、あたふた百花圖を遁げて出る。

白髯の土手へ上るが疾いか、さあ助からぬぞ。二人乗、小官員と見えた御夫婦が合乗也。ソレを猜み

は仕らじ。妬きはいたさじ、何とも申さじ。然りながら、然りながら、同一く子持でこれが又、野郎が膝にぞ抱いたりける。

わツといつて駈け抜けて、後をも見ずに五六町、彌次さん、北八、と顔を見合はせ、互に無事を祝し合ひ、まあ、ともかくも橋を越さう、腹も丁度北山だ、筑波おろしも寒うなつたと、急足になつて来る。言問の曲角で、天道是か非か、又一組、之は又念入な、旦那様は洋服の高帽で、而して若様をお抱き遊ばし、奥様は深張の蝙蝠傘澄して押並ぶ後から、はれやれお乳の人がついて手ぶらなり。えゝ！日本といふ國は、男が子を抱いて歩行く處か、もう叶はぬこりやならぬ。殺さば殺せ、とベツたり尻餅。

旦那お相乗参りませう、と折よく來懸つた二人乗に這ふやうにして二人乗込み、浅草まで急いでくんな。安い料理屋で縁起直しに一杯飲む。此處で電燈がついて夕飯を認め、やゝ人心地になる。小庭を隔てた奥座敷で男女打交りのひそ／＼話、本所も、あの餘り奥の方ぢやあ私厭アよ、と若い聲の媚めかし

さ。旦那業平橋の邊が可うございますよ。おほ、  
と老けた聲の恐しさ。圍者の相談とおぼしけれど、  
懲りて詮議に及ばず。まだ此方が助りさうだと一笑  
しつゝ歸途に就く。噫此行、氷川の宮を拝するより、  
谷中を過ぎ、根岸を歩行き、土手より今戸に出で、  
向島に至り、浅草を経て歸る。半日の散策、神祇あ  
り、釋教あり、戀あり、無常あり、景あり、人あり、  
従うて又情あり、錢の少きをいかにせむ。

【完】